Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

ロシアを示す日本独自表記「露」出現と定着

横田，きよ子

(Citation)
國文論叢,52:52-36

(Issue Date)
2017-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041337

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041337

ロシアを示す日本独自表記「露」出現と定着

横　田　きよ子

日本でのロシア国名の漢字表記は中国系の資料の影響が見られる（マテオ・リッチの漢訳世界地図『坤輿萬國全圖』（1602）所載漢字表記を初めとして唐通事の影響も含む）。世界国名の漢字表記に関しては、数例の日本独自表記を除くすべてが中国の漢訳表記の借用とその変形である。日本独自表記とは、外国で使用されず日本でのみ使用された漢訳の影響がみられない表記であり、外来語ではない。日本独自表記については台湾を示す「高山国・高砂」とロシアを示す「露國」及び「赤人・赤蝦夷」表記の２地名を確認している。前者台湾については拙稿[1]で述べた。1858年の『魯西亞國條約並税則　全』（刊記なし）では「魯西亞」のみが51例記載されていた。なぜ1875年突然に「露國・露西亜」が使用され始めた[2]のであろうか。この理由として「ロシアからの申し入れがあった」[3]との記述については、確証となる記載は他資料で確認されていない。ここでは「露」表記の使用例の調査及びその結果から「露」定着について示す。

1.「露國」について

先行論文の熊沢徹「日魯から日露へ」[4]では、『公文録』[5]により、「一八七五（明治八）年夏を境に、その後発表された布告類はすべて露号を用いるようになった。」としている。「露号」へ変化した理由は不明で、「この問題については、今後新たな史料発掘に委ねる以外にない」[6]と記載している。

“CHINESE-JAPANESE WORDS”[7]によると「Ro 魯」の見出しで「Foolish;stupid;blunt」とあり、更に熟語「魯鈍」、「魯魚」、「魯莽」、「魯酒」が記載され、それぞれの意味が英文で示されている。これらは悪い印象を受ける言葉である。また、『大漢和辞典』[8]によると「魯」は「①おろか・にぶい（鈍）、②國の名、③みち（道）、④鹵に通ずる」と説明しており、字義として悪い印象も併せ持つ。一方、「露」は「Dew;to moisten;appear;be disclosed.」と記載され、熟語は「Ro-dan 団」以下16例掲載されているが、どの語も悪い印象の意味ではない。この例の一つに「Ro-mei| 命 ,life」がある。「露命」とは「露のようにはかない命」と説明される語である。また文学上、「露」は「美しい水滴」以外に「はかなく消えやすい」、「涙のたとえ」にも使用されてきた語である。日本人にとって「露」は「はかない」と同等の意味も感じる語である。これに対

して、儒教を尊重してきた日本では「魯」は孔子生誕の国名として世間で知られているため、辞書から受ける語の印象とは異なり、一般的に良い印象がある。

中国の辞書『辞源』（1915 年初版 1918 年五版[9]）には、「露西亜」は「俄羅斯之異名。日本謂俄羅斯曰露西亜。省称曰露。」と説明されている。『辞源』で「露西亜」が取り上げられた理由については、一般的な「俄羅斯」（「俄」はロシア語の巻き舌の「R」音を表すため〈ヲ上声〉を使用）の表記に対し、日本の「露西亜」及び略称「露」の使用が異例であるためである。日本では幕末・明治初期に「俄羅斯・魯西亞」が使用されている。当時多用された「魯西亞」の「魯」（上声）と「露」（去声）は四声が異なるため異声調文字表記であり、中国ではロシアの「ロ」に相当する漢字として「露」は使用されない。外国地名の多くは表音文字表記であるが、漢字は表音と表意を合わせ持つため、日本ではこの表意を変更するために「露」へと変更したのだろう。

2.『日本外交文書』による表記

「明治８年夏の布告類」でのロシア表記について、『公文録』及び関連する『日本外交文書』[10]によって確認した。『日本外交文書』でのロシア表記記載について表１、表２に示す（○「露」使用、□混用、△「魯」使用）。

表１　『日本外交文書』記載のロシア表記（明治６～８年）

時期	表記区分	表記	
明治６（1873）	△	魯	
明治７（1874）年１月, 10 月	△	魯・魯國	
同年　　1,2,3,12 月	△	魯・魯西亞（公文録、外務省伺）	※１
明治８（1875）年 1,2,3,4 月	△	魯（榎本武揚）・美（榎本武揚）・魯西亜	
6 月 22 日	○	露西亜國（12ヶ所）	※２
6 月 23 日	△	魯國	※３
6 月 26 日	△	魯ノ理事官・魯理事官	※４
7 月 7 日	□	露西亞辨理公使セ、スツルウエ／魯國人民・露國・魯文	※５
7 月 9 日	△	魯國都府・魯國辨理公使スツルウエ	※６
7 月 20 日	△	魯西亞國辨理公使セ、スツルウエ／魯人	※７
7 月 25 日	○	露國辨理公使	※８
7 月 28 日	□	魯文・露國公使	※９
7 月 31 日	○	露公使	※10
8 月 2 日	○	露國理事官・露西亞國	※11
8 月 2 日付　同前日文書	△	魯領	※12
8 月 3 日	△	魯公使・魯文	※13
8 月 4 日	○	露國・露公使	※14
8 月 7 日	△	魯國理事官	※15
8 月 9 日	○	露國辨理公使スツルウエ	※16
8 月 13 日	○	露國公使・露人・露國政府	※17
8 月 22 日	○	露國・全露西亞皇帝陛下	※18
8 月 23 日	□	魯國（文中）・露西亞辨理公使セ、スツルウエ（署名）	※19
8 月 24 日	△	魯西亜・魯	※20
8 月 25 日, 27 日	○	露國	※21

※1　『公文録』（「外務省伺」）
※2　外務大少丞より調所開拓幹事宛 p.235
※3　調所開拓幹事より外務大少丞宛 p.235
※4　榎本公使より寺島外務卿宛電信
※5　樺太千島交換條約協討議の対話書 p.236
※6　寺島外務卿より三條太政大臣宛
※7　寺島外務卿とロシア公使との対話書
※8　和訳文
※9　寺島外務卿とロシア公使との対話書
※10　寺島外務卿とロシア公使との対話書
※11　寺島外務卿より三條太政大臣宛
※12　榎本公使より寺島外務卿宛
※13　寺島外務卿とロシア公使との対話書
※14　寺島外務卿とロ公使幷理事官との対話書
※15　開拓使
※16　和訳文中
※17　樺太千島交換條約協議
※18　樺太千島交換條約和訳文中
※19　樺太千島交換條約の布告に関し上伸、寺島外務卿から三條太政大臣宛
※20　榎本公使より寺島外務卿宛
※21　樺太千島交換條約協議、寺島外務卿と露國公使応接筆記及び附属書

表2　『日本外交文書』記載のロシア表記（明治９年）

時期	表記区分	表記	補足
明治9(1876)年1月22日	△	魯西亜	樺太漁業出稼願の附属書、漁民文書
1月29日	○	露國	外務卿文書、寺島外務卿から三條太政大臣宛
3月2日	○	露西亜國	樺太漁業に関する太政官布告
3月5日	△	魯人・魯政府・魯國・魯政府	寺島外務卿より榎本全権公使宛指令
3月10日	□	露國／魯國理事官	開拓判官より外務大少丞宛

『公文録』（国立公文書館デジタルアーカイブ）では「露」は明治８年８月に初見されるが、以後に「魯」も使用されている。また、同じ頃「内史課」の文書はすべて「魯」であった。商務局の明治11年度及び12年度『商況年俸』（明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料』別冊18　1966年）でも「魯西亞・魯」表記である。

「露」については、表1のように1875年6月22日の使用（外務大少丞）が初めである。開拓使からの返書は「魯」が使用されている。同年７月７日では混用されているため、対話の翻訳者は「露」と「魯」の使用に区別はしていない。樺太千島交換条約に関する文書及び対話書（1875年６月及び７月）の翻訳和訳文では「露」が使用され、以降は外務省の公的な文書では「露」が多い。ただし、内部の記録では「魯西亞」及び「魯」も使用されている。

「幕府時代魯人北海之関係」（重野安繹1904年３月13日東京学士院講演）にてロシアから申し入れがあったのは「明治五・六年」（1872，1873年）ということだが、その頃の文書に「露」は見られず、国名表記変更についての記載はない。また、『東京外国語大学史』（第一編 p.62）では、1876年にロシア領事館から日本政府に「魯西亜、魯国は魯鈍を連想させるので、そうした差別的表記ではなく、より詩的な露を国名としてもちいるようにとのクレーム」があったと記載されるが、その確実な資料を示していない。

日本政府は幕末（1855～1862・3年頃）よりカラフトの50度境界を主張していたが、ロシアは日露共同使用として境界決定は行わないと譲らなかった。日本国内では副島外務卿による樺太買地案と黒田清隆建言書による境界確定先行論[11]があり、樺太千島[12]交換については1872年の会談を経て1875年に決定した。この1875年は日本政府にとってロシアに対して快い気持ちをいだかせない年となったであろう。この年に「魯」からはかない印象を併せ持つ「露」へと変更したことは、歴史的視点と既述の語の意味の観点から、ロシア側からの申し入れというよりも日本側の思惑があったのではないだろうか。条約文（1875年5月7日仏文和訳）ではすべてのロシア表記は「魯・魯西亞」である。東京での批准（同年8月22日）で付加文と布告文（同年11月10日）はすべて「露西亞」である。

日本では、江戸末期から明治時代にかけ、ロシアを示す漢字表記のなかでは「魯西亜」が最も多く見られる。傍書は「ロシヤ、オロシヤ、ロシア、ルシヤ」である。例えば『北槎聞略』（杉本つとむ編 早稲田大学出版部1993年影印 原1794年）・『環海異聞』（杉本つとむ編八坂書房1986年原1807年）・『新製輿地全図』（箕作省吾　和泉屋等1847年）・『暗射世界地図』（塩津貫一郎官許出版人竹内文祐1875年）では「魯西亜」と記載されている。題箋等欠く節用集（凪之子編集　京都書林　二鳩堂壽　額田正三郎等1741年彫刻1776年新板）・『増補新刻倭節用集悉改大全　全』（俣野通尚纂補 東都書林 須原屋茂兵衛等1826年 万国総図では「おろしや」）・『永代節用無盡藏』（堀原甫子再輯 江戸書林 京都書林 須原屋茂兵衛等1831年旧刻1849年再刻）では「魯國（ろこく）」（最後書物の記載地図では「魯國（ろこく）」・「オロシヤ」が見られる）と記載されている。

中国書『瀛環志略』（井上春洋等訓点『瀛環志略』對嵎閣蔵梓1861年による原1848年）は、「俄羅斯國」の見出しで他に「魯西亜」を含め13種の異漢字表記が示されているが、「露西亜」は記載されていない。中国書『地理全志』（英国慕維廉著壮快楼蔵梓1858年）は「峨羅斯」、『増広海国図志』（魏源著 上海書局石印本影印、珪庭出版社1895年　原1847年）及び『標準漢訳外国人名地名表』（何崧齢編 商務印書館1975年汲古書院影印 原1924）は「俄羅斯」、『辞海』（地理分冊　外国地理1976年）は「俄羅斯聯邦」、同前書（1980年版）では「蘇聯・俄羅斯」と記載されている。江戸時代末期及び戦前の中国では「峨・俄」が使用されていることが分かる。マテオ・リッチ『坤輿萬國全圖』（1602）では、地方名として「魯西亞」が記載され、日本ではこの表記の影響を受けている。

「露西亜」という表記は、中国でのロシア表記である「魯西亜」の「魯」を日本漢字音で「ロ」と読む「露」に変換したものであり、借用語「魯西亜」の語頭の一文字を変形したと見なすべきであろう。即ち全面的な日本独自表記ではなく、「露」の部分のみが日本独自表記といえる。

日本では、日本語発音「タ」で「大」を「太」（「ダイ・ダ」と誤解するような「大」に対して日本での読みが「タ」に限定される）に変更する場合はあるが、一般的には画数の少ない語に換えられる場合が多い。「魯」から「露」への変換では逆に画数が多く

なっているため、通常の変更とは異なる意図があったのだろう。「ロ」の発音として外国地名で使用されている文字は1875年以前に「羅・呂・勒・漏」等[13]があるが、「露」はそれらとは異なる。ロシア国名表記に「露」が見られる以前、18世紀初頭南米ペルー[14]を示す表記に「露」が使用されていた。ロシア表記「露」が初見される直前に、ペルーは『東京日々新聞』[15]では「秘魯」[16]（1875年5月30日）・「白露（ペーリウ）」（1875年6月17日）、『朝野新聞』[17]（1874年10月2日・18日）では「白露」（10月2日記事に左傍書「ぺりう」）と記載されている。また、プロシア[18]を示す表記でも「孛漏士・普魯西・孛露西・普爾西」等が見られる。日本語音読みが同じなら漢字は異なっても構わないというこれらの表記に並んで、ロシアの「魯・露」表記もあると考えられる。

日本人は漢字表記が外国地名の音写文字であることは理解していた。漢文に詳しい者は、漢籍記載のまま使用したり（渡辺崋山は中国表記の「魯西亜･俄羅斯･羅叉･羅刹・鄂羅斯･老鎗･老羌」等を使用）、その音読みで慎重に中国音に合致するように（柳川春三のフランス漢字表記は「佛蘭西・佛朗西・法郎西・法蘭西」のうち、「法郎西」は日本でのみ見られるのであり、中国資料に見られない）使用したりした。一方で、日本語の発音が同じならばよいとする者（福澤諭吉[19]等、ただし、彼はある時期まで「魯西亜」を使用し、『福翁自伝』[20]では「露西亞」を使用した）もいた。

3. 明治期の資料でのロシア表記

3.1 「国名盡」類

表3 「国名盡」類記載のロシア表記

書物名	表記
邨上義宗『五大洲國名盡』（開誠堂 無刊記）	魯西亜（ロシア）、魯
『世界國名盡』（書林會社、内題「學童必携 世界國名盡」無刊記）	魯西亜（ロシヤ）、俄羅斯、魯（ロシヤ）
『萬國名』（京都府蔵版 村上勘兵衛 無刊記）	魯西亞（ロッシヤ）、魯西亞
内田正雄『海外國勢便覧』（大學南校1870年）	魯西亜（ロシア）
大屋愷欹『萬國名數記』（臥龍書房蔵板1871年）	魯西亜（ロシア）、魯西亜、俄羅斯（ヲロシヤ）、リュスラント
青木輔清『世界國名盡』（秋田屋市兵衛等1871年）	魯西亜（ロシヤ）、俄羅斯、魯（ロシヤ）
臥龍軒清風『宇内国勢概表』（書林会社 袋屋亀蔵等 1872年）	魯西亜（ロシヤ）
黒田行元『世界都府盡』（文求堂1874年『教科書大系』講談社）	魯細亞（ろしあ）
井出猪之助『暗射地球全圖記』（大阪書林1874年）	魯西亜
千葉師範學校編輯『地名称呼』（東京書林 出雲寺萬次郎1876年）	魯西亞（ルッシヤ）（「ッ」には「゜」が付される。）
岡田伴治『世界國つくし』（博真堂 原1879年）	魯西亜（ろしや）
加藤高文『泰西名数學童必携』（華井聚文堂1879年）	魯西亞、魯國

表3のように明治初期（1871～1879年）に発行された「国名盡」類に「露西亜」は見られない。読みは「ろしや」、「ろしあ」、「をろしや」であり、1876年には英語（蘭語）の音訳「ルッシヤ」が見られる。これらは教育の場で用いられた。他の教育関係書

では、文部省『万国地誌略』（師範学校編輯、1874 年序、1883 年翻刻）に「魯西亞」が見られる。また、文部省『脩身論』（阿部泰蔵訳 1874 年準拠、1875 年翻刻）に「魯西亞」が 3 例見られ、西村兼文編修『外國史略』（寿楽堂 1874 年）に「魯西亜」が 114 例、「魯」が 9 例、「俄羅斯」が 1 例（ただし、この 1 例は本文ではなく枠上段の見出しとして使用されている。従って、作者とは異なる別人の表記であろう）見られる。

「露西亜」が記載されるのは、『日本教科書大系』（第 16 巻 講談社 1965 年）では『萬国地理初歩』（学会指針社 1893 年）が初めである。これは外交文書より 18 年遅れている。架蔵の『萬国地理初歩』（1893 年 7 月印刷発行 1894 年 1 月訂正再版）には同様に「露西亜」と記載され、1894 年 1 月 17 日文部省検定済と記載されている。『小学校用外國地理』（金港堂 1893 年印刷、明治 27 年文部省検定 1894 年刊）、『小学地理巻三』（学会指針社 1900 年印刷訂正 再版 明治 34 年文部省検定済）でも「露西亜」及び「露國」が見られる。

3.2 明治期の新聞

幕末明治期の新聞におけるロシアの国名表記は、西浦英行「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国名称・表記について」（『皇学館大学紀要』第九輯）によれば「俄羅斯、魯西亞、オロシヤ、ヲロシヤ、ロシヤ、ロシア、ルシア」であり、「露」は見られない。それ以後の新聞について調査した。

①『東京日々新聞』（『東京日々新聞　3』複写　日本図書センター 1994）

表 4　『東京日々新聞』記載のロシア表記

時期	表記区分	表記
明治 6 （1873）年 9 月 3 日	△	魯國ノ政府、英魯ノ両雄 ※1
明治 8 （1875）年 6 月 4 日	△	魯西亞（おろしや）
6 月 17 日	△	魯西亞帝、魯京、魯帝
6 月 20 日	△	魯西亞帝、魯帝
6 月 28 日	△	魯西亞
7 月 5 日	△	魯西亞
7 月 14 日	△	魯西亞國、魯國軍艦
8 月 14 日	△	魯、魯西亞、魯國
8 月 28 日及び 31 日	△	魯西亞
9 月 6 日、9 日、14 日、18 日	△	魯
10 月 2 日、28 日、30 日	△	魯
11 月 2 日	△	魯西亞公使、魯國
11 月 16 日	○	露西亞國 ※2
11 月 27 日、30 日	△	魯
12 月 10 日、12 日、13 日、17 日	△	魯

※1「海外新報」覧　　※2「太政官記事」欄

明治８（1875）年 11 月 16 日の「太政官記事」欄で「露西亞國」が初見される。この記事に関しては『假名讀新聞』より３日早い。「今般露西亞國ト千島樺太兩島交換條約別紙ノ通リ取結相成候條此旨布告候事　明治八年十一月十日　太政大臣三條實美」と記載される（『假名讀新聞』掲載文とは仮名文字の小異がある）が、その後半部の「樺太千島交換條約」（５月７日締結）でのロシア表記は、「全魯西亞國皇帝陛下」（９例）、「魯帝」、「魯國」、「魯人」、「魯西亞」が使用されている。同じ記事の公布文と条約文で異なるロシア表記が見られるのは、政府文書をそのまま引用したためである。外交上、政府（外務省）は条約文作成時にその時通用していた文字「魯」を使用し、ロシア表記変更の理由は述べず「露」で公布したということだろう。

②『朝野新聞』（東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編　ぺりかん社 1981 年）

（⊙「露」使用、⊡混用、⚠「魯」使用：以下同様）

⚠明治７（1874）年７月 10 日に「魯国」、「魯西亞政府」が見られる。10 月 25 日に「魯政府」、「魯領」が見られる。９月 25 日に「魯帝」、10 月２日に「魯国首府」、「魯国大臣」、「魯国官吏」が見られる。

⊡明治８年 11 月 17 日に官令欄に「露西亞國ト千島樺太交換條約」が見られる。条約文では「魯西亞」が見られる。これは『東京日々新聞』と同様である。

⚠明治 12 年７月４日に「魯都」が見られる。

③仮名垣魯文『假名讀新聞』（山本武利監修『復刻仮名読新聞　１』明石書店 1992 年）

⊡明治８（1875）年 11 月 19 日で「官令（おふれ）」欄に「今度露西亞國と千嶋樺太兩嶋交換條約別紙の通り取結候條此旨布告候事　明治八年十一月十日　太政大臣三條實美」（傍書略）として布告の前部が掲載され、文章中に「全露西亞皇帝陛下（ぜんろしあこうていへいか）」（３例）が見られる。一方、これに続く「新聞（しんぶん）」欄では「魯西亞領（おろしやりやう）」、「魯國官員（ろしやくにん）」、「魯帝（ろてい）」、「魯國（ろこく）」が見られる。読みは「ろしあ」、「おろしや」、「ろしや」と一定していない。ただし、「露西亞」等を初見したとしても日本語音読みの一致から容易に大衆は「ロシア」又は「ロシヤ」、「オロシヤ」と読めたであろう。この新聞と同著書〔『西洋道中膝栗毛』（萬笈閣 1870・1871 年等）、『世界都路』（回春樓蔵、萬笈閣 1872 年）〕においても、当時日本で一般的に多く使用されており、著者自らが使い慣れた「魯西亜」（右傍書「ろしや」）を用いている。

④『郵便報知新聞』（『復刻版・郵便報知新聞』柏書房 1989 による）

⚠明治６（1873）年 12 月号では６日、８日、12 日、21 日、27 日、29 日にロシア表記が見られ、それらはすべて「魯」である。

⊙明治９（1876）年３月２日公布欄記載の「樺太千島交換條約」ではすべて「露」としている。政府文書の条約文中の「魯」を「露」に変更して記載しているが、公布文の文字を変更することは通常は考えられず、異例である。ただし、前記『假名讀新聞』及び『東京日々新聞』及び『朝野新聞』の掲載日より約３カ月半遅れて記載されているので、その記載で違和感はなかったのであろう。

⊙明治９（1876）年３月３日公布欄で「露西亞國」が見られる。

⚠明治９年３月号では 20 日、22 日に「魯國」が見られ、25 日に「魯人」が見られる。上記３月３日に政府が使用した表記とは異なっている。
⊙明治 10（1877）年４月 27 日号「露西亞皇帝、露軍」、「露西亞」（ロシアとトルコの戦争についての記事）が見られる。
⊙明治 18（1885）年１月号では２日「獨露、露國、露境、露廷」・10 日「露國、露」（各２例）、「龍動通信」欄の「露西亞」、11 日「龍動通信」欄の「露西亞（３例）、露墺二帝、露帝」、13 日「獨露米の軍艦」、「露國人」、16 日「露國民兵」（２例）、18 日「英佛普露の國」、21 日「露國」、23 日「露獨墺ノ波蘭ヲ分チタル如キ」・「露帝、露國」、29 日「墺曼露ノ三国」（２例）が見られる。この号では明らかに社方針として「露」が使用されている。
⚠明治 18（1885）年１月において、個人寄稿文「小言」欄で８日「魯西亞一国の士卒」、10 日「魯西亞帝」が見られる。個人では、まだ「魯」を使用する者がいた。
⊙明治 19（1886）年１月号では 15 日「獨、澳、露の三帝国」、16 日「露國駐剳特命全権公使」、17 日「露将」、21 日「露公使」と記載されている。「露」のみが見られる。
⑤『廣益問答新聞』（四通社社長　服部誠一　假編輯長　大谷信道 1879 年）
⚠明治 12 年６月 13 日発兌（第 345 号）「魯帝ヲ狙撃シタル兇賊中ニ十七年ノ別嬪アリ」では「魯國皇帝陛下」、「魯國虚無党」、「魯國」（７例）が見られる。
⑥『中外物価新報』（日本経済新聞社監修『中外物価新報復刻版』柏書房 1999 年等による）
⚠明治 13（1880）年６月９日（第 304 号）「倫敦諸相場四月十六日」欄で「支那国債証書ハ、魯國ト紛紜ノ噂アルニヨリ一磅方モ下落セリ」が見られる。
⊙明治 18（1885）年１月８日（第 893 号）「雑況」欄で「我が比叡艦日進艦並に蓬萊丸なり、其他は英露獨三国の軍艦各一艘づゝなり」が見られる。
⊙明治 18（1885）年４月 30 日（第 941 号）「雑況」欄の「阿冨汗事件」で「英露両國、露國東洋艦隊、英露の葛藤」が見られ、同欄の「英露戦備」で「露京、英露開戦、露國全陸軍」が見られる。これについては小林肇氏による調査[21]で 2012 年『日本経済新聞』にて、「『中外物価新報（『日本経済新聞』の前身）』では明治 18（1885）年４月 30 日に「露」がロシアを表す見出しとして初めて見られる。」と記載された。記事文中の「露」については、上記のように同年１月８日が初見である。
⑦『日本経済新聞』（2012 年９月 11 日記事）
　小林肇氏による調査[22]にて「東京外国語学校（東京外国語大の前身、1873 発足）の魯学科が露学科に名称変更されたのは 1877 年である。」と紙面に記載された。『東京外国語大学史』（資料編一　2001 年）では変遷図に「1877 年　露語学科」と記載されており、背景として 1876 年にロシア領事館からのクレームがあったとのことである。一方、『文部省第十二年報』では、1884 年「東京外国語学校ハ、仏、独、魯、漢及ヒ朝鮮語学ヲ教授スル所ニシテ」と記載されており、「魯」表記が使用されている。東京外国語大学と文部省で「露」表記使用の時期が異なっていた。

⑧『江湖新報』第 121 号～130 号（1881 年 11 月 21 日～12 月 21 日 四通社）
⊡記事「露國の近況」において「魯國・魯國政府・露國・魯國・露國・魯帝（３例）・露國（２例）」の順に見られる。（1881 年 12 月５日）
⊙記事「露國政府モ亦将ニ圧制ノ非ニ悟ラントスノ政事家眼ヲ刮シテ宇内ノ景勢ヲ見ヨ」において「露國、英露、露國、露國人民、露國、露國皇帝陛下、露國社稷、露國皇帝陛下、露國政府（２例）、露國」の順に見られる。（1881 年 12 月 18 日）

略称のみで記載されているのは、新聞の故に紙面の有効利用のためか、読者に周知されていたためであると考えられる。いずれも見出しは「露國」が使用されているが、前者（12 月５日）記事は「魯」で書き始められ、文中に「魯」と「露」が混用されている。そして 13 日後（12 月 18 日記事）には「露」表記で統一されている。

⑨『神戸又新日報』（1886 年１月～４月、五州社マイクロフィルムによる）
⊙「露國の元始日」（1886 年１月 14 日）と題し、「露國」が見られる。
⚠「名家の死亡表（昨 18 年中）」（1886 年２月 24 日）と題し、「日本東京駐剳魯國公使ダビドウ」が見られる。
⊙「紐育トリビューン（本年２月 26 日官報）」（1886 年３月２日）と題し、「露國」、「英、露両國の定界」が見られる。
⊙「歐洲諸強國海軍の景況」（1886 年３月 26 日）と題し、「露國」、「露國政府」が見られる。
⊙「公報」（1886 年４月 10 日）と題し、「露西亞國沿海州」が見られる。
⊙「外交官交際費」（1886 年４月 17 日）と題し、「英、米、露、佛四國の全権公使」が見られる。

「公報」で「露」表記であるのは、公報文通りを掲載したと考えられる。また 1886 年２月 24 日の記事が「魯」であるのは引用のためであろうが、「魯」は一般にまだ通用可能であったということであろう。しかし、1886 年１月 14 日には『神戸又新日報』は基本的に「露」を使用する方針となっていたと考えられる。

以上、新聞においては、「樺太千島交換條約」（1875 年）の外交文書及びその公布を掲載したのが「露」表記の初めである {『東京日々新聞』（1875.11.16）、『朝野新聞』（1875. 11.17）『假名讀新聞』（1875.11.19）、『郵便報知新聞』（1876.3.2）}。公布文を除けば、「露」は『郵便報知新聞』（1877.4.27）、『江湖新報』（1881.12.5）に早くから記載され、1880 年代の半ば頃にはすべての新聞で見られるようになった。「露」の初出は各新聞で異なることから、「露」が公布で使用されると、政府からの指示ではなく新聞社が政府の使用する文字を徐々に取り入れたということであろう。

3.3 明治期の地図類（◈；「俄」等）

◈『掌中萬國輿地細全圖』（石田斎圖並刻 村上出店 1872 年）；「峨羅斯」、「哦羅斯」
⚠『新刻掌中航海世界全圖』（臥龍軒縮図　書林会社 1873 年）；「オロシヤ」「魯西亜」
◈『増訂 輿地航海全圖』（仙臺岡修撰 名山閣和泉屋吉兵衛原 1872 の 1875 年再刻）；

「魯西亜」、「鄂羅斯國」、「哦羅斯国旗」、「魯西亞旧都モスコー」、「俄羅斯國使布恬廷氏」
◈『地球要覧』（林正躬著 京都書林藤井孫兵衛等 1874 年官許 1875 年刻成）所収地図；「魯士亜」。ただし、目次では「峨羅斯又魯西亞」、本文では「峨羅斯」と記載され、地図上とは異なる表記である。
⚠『世界地圖』（塩津貫一郎訳述 竹岡文祐出版官許 1875 年);「魯西亜」
⚠『小学用　萬國地圖』（英國ヒリプ氏著 尾藤庸一譯 1877 年序、1878 年 竹岡文祐出版）;「魯西亞」、「魯西亜」、「大魯部」、「小魯部」、「魯部」、「南魯部」
⚠『万国地誌略諧射譯圖』（岐阜県師範學校蔵版　山田申太郎等 1878 年）;「魯西亜」
⚠『萬國譯圖』（浅野明道著 小澤吉三郎出版 1879 年）;「魯西亜」
⚠『小學用萬國暗射譯圖』（沼田教太郎著 大阪書肆浅井龍章堂 1885 年）;「魯西亞」
⚠『學校用萬國地圖』（長尾陽三抄譯 出版人高橋松之助 1885 年）;「魯西亜」
◈『明治新撰萬國精圖』（後藤七郎右衛門編輯風月庄左衛門板 1886 年）;「魯西亜」、「魯西ヘイトルスホルク」、「哦羅斯国旗」
⚠『新撰萬國全圖』（酒井捨彦著 小林喜右衛門 1887 年）;「魯西亜」、「魯國」
⚠『萬國地圖』（上田貞治朗纂譯 青木嵩山堂 1885 年版権免許 1891 年改正再版）;「魯西亜」、「魯西亜帝國」、「魯失亜帝國」、「魯失亜領」、「大魯西亜」、「南魯西亜」、「小魯西亜」、「西魯西亜」、「RUSSIA」
⚠『萬國地圖』（萩原国三著 1890 年）;「魯西亞」
⊙『校用萬國新圖』（酒井捨彦著 仙鶴堂文盛堂 1893 年）;「露西亞」（３例）、「大露西亞」、「小露西亞」、「東露西亞」、「西露西亞」、「南露西亞」、統計表の部には「露西亞」、「露西亞」（８例）、「魯西亜」（３例）が見られる。
⚠『新撰萬國地理』（山上萬次郎等 冨山房書店 1893 年出版の 1895 年訂正七版）挿地図；「魯西亞帝國」、「魯西亞」、本文でも「魯西亞」、「魯國」、「魯帝」が見られる。
⊙『中學外國地誌』（金港堂書籍株式会社編輯所編輯三宅米吉校 金港堂書籍 1896 年）所収地図；「露西亞」、「露領亞細亞」。本文には「露西亞」と記載されているので、英語発音から「ルシヤ」としたのであろう。
⚠『教科適用萬國新地圖地理統計表』（若原與三郎著中村鐘美堂 1893 年初版の 1894 年第三版）;「魯西亞」、「大魯西亞」、「西魯西亞」、「小魯西亞」、「南魯西亜」
　第三版の刊記は「1893 年 11 月 14 日訂正印刷同年 11 月 23 日発行、1894 年 1 月 25 日再版、同年３月５日第三版」と記載されている。
⊡『教科適用萬國新地圖地理統計表』（若原與三郎著 中村鐘美堂 1894 年訂正第一版）
　地図内には「RUSSIAN EMPIRE」、「露西亞帝國」、「露西亞」、「RUSSIA」が見られる。ただし、山本虎一纂著「新編萬國地理統計要覧」の部には「魯西亞 Russia」、「魯西亞」、「魯西亞語」、「魯西亜本部」が見られ、「魯」表記である。
　訂正第一版地図は「1894 年 10 月 15 日訂正第一版、同年 10 月 20 日発行」と記載されている（表紙の左上の隅には「第七版」と記載）。訂正前第三版の時期と併せて考慮すると、1894 年の３月から 10 月の間に地図では「魯」から「露」に訂正されたことに

なる。
⊙『教科適用萬國新地圖地理統計表』（若原與三郎著中村鐘美堂 1901 年 第十版）；すべて「露西亜」
この地図には明治 34（1901）年第十版と記載されているが、上記 1893 年の訂正前の初版から数えると 30 版にあたる。統計表の部でもすべて「露西亜」表記である。この第十版の刊記によると明治 32（1899）年 10 月 29 日に訂正第一版となっているので、1899 年には地図及び文中ですべて「露西亜」表記となっており、「露」が定着したと考えられる。
⚠『大日本海陸里程新地図』（森熊五郎著矢島嘉平次出版 1899 年初の 1900 年第 3 版）；「魯西亜」
⊙『萬國地圖』（大橋新太郎著 博文館 1891 年 4 月の 1894 年 10 月十四版）；「露西亜」
⊙『世界新地圖』（エチ、エム、ランヂス眞野文二共著三省堂書店 1894 年の 1897 年十四版）；「露西亞」、「露國」
⊡『実地測量萬國新全圖』（編集兼発行者田平義三郎 1900 年）；「露西亞（ロシア）」、「我羅斯（国旗）」
⊙『教科用書　大字萬國地圖』（森熊三郎著田中榮堂 1899 年初版の 1901 年三版）；「露西亞」、「露西亞國」、「露西亞帝國」
⊡『世界讀史地圖』（依田雄甫著 冨山房 1898 年初版の 1902 年第四版）；「露國」、「露西亞」、「莫斯科國」（16C.）、「モスコフ大公國」、「露西亞帝國」、「俄羅斯」、「ロシア」「書目」及び「目次欄」でも「露國」、「露西亞」が見られる。「莫斯科國」表記は過去の呼称である。「魯」表記は全く見られない。
⊙『小學外國地誌』（新保磐次著 金港堂書籍株式会會社 1900 年）；記載地図で「露西亞」、本文でも「露」が見られる。
・『最近統合外國地圖』（山上萬次郎著大日本圖書株式会社 1903 年）；「ロシヤ」
⊙『時事新報滿韓地圖』（時事新報社編集兼発行 1904 年）；「露西亜」、「露領西比利亜」、「対露事件」
⊙『日露滿韓地圖』（白井理三郎著 扶桑新聞第 5151 号附録 1904 年）；「露領西比利亜」
⊙『日本輿地圖』（後藤七郎右衛門編 鐘美堂 1906 年）；「露領西比利亞」、「露領カムチヤカ」、「露領」
同編者の『明治新撰萬國精圖』（既述）では「魯」・「哦」表記であったが、ここでは「露」が使用されている。
・『四十二年元旦附録世界交通全圖』（大阪毎日新聞社新撰訂刻 1909 年）；「ロシア」
・『普通教育外國地圖』（山崎直方編 開成館 1906 年の 1910 年修正六版）；「ロシア」
・『文部省小學地理附圖』（地理研究会著作 田中宋栄堂 1906 年訂正増補）；「ロシヤ」
⊙『小學地理附圖』（高等小學校用）（文部省 三省堂書店 1908 年）；「ロシヤ」
ただし、附録の部で「亞細亞露西亞（アジヤロシヤ）」、「歐羅巴露西亞」、「露西亞」、「亞細亞露西亞」が見られる。

・『小學地理附圖』（尋常小學校用）（文部省三省堂書店 1908 年）；「ロシヤ」
附録の部でも「ロシヤ」が見られる。

明治初期の地図には「露」は見られず、「魯」又は「俄」（多くは「ロシヤ」、三書には「オロシヤ（オロシャ）」と発音した「俄・阿」が見られた。）であった。地図では「露」の初見は 1893 年である。1894（明治 27）年には「露」と「魯」は共存して見られた。傍書によると多くは「ロシア」と呼称したことが認められる。1899 年以後「魯」は見られなくなり、「露」（上記地図中二書には「俄」と混在）が見られる。1903 年以後は地名の片仮名表記のみ記載の地図も見られた。地図は踏襲性が高いといえる中で、改訂している地図（1894）が見られることは文部省の意向があった可能性が高い。1904～05 年の日露戦争以後は、ロシアを表す漢字表記は「露」のみであった（明治天皇の宣戦詔勅に「露國」のみが使用された影響を受けたであろう）。傍書及び片仮名表記に「オロシヤ」及び「ゴロス」は見られなくなり、「ロシア」及び「ロシヤ」が見られるようになった。

3.4　明治期の雑誌におけるロシア国の表記

①『国民之友　第壱集』（民友社 1889 年）

⊙「外交の憂は外に在らずして内に在り」（1887 年 3 月 15 日発兌国民之友第二号）と題し、「英露来り侵す可しと驚き」が見られる。

△高橋五郎「東京大学出板蝦夷日本関係一斑略評」（1887 年 3 月 15 日発兌国民之友第二号）と題し、「魯国の学士」が見られる。

△浮田和民「英雄崇拝論」（1887 年 7 月 15 日発兌国民之友第六号）と題し、「魯国人」が見られる。

⊡高橋五郎「政治家漫評（其一）日支露関係」（1887 年 9 月 15 日発兌国民之友第八号）と題し、文中では「魯艦」、「魯人」、「魯国」（3 例）、「日魯両国」、「魯」が見られる。題名には「露」を使用しているが、文中では「魯」を使用しているので、題名は筆者とは別の編集者が関与したと考えられる。

国民之友社においては 1887 年以後「露」表記を使用している。ただし、寄稿者は「露」ではなく「魯」を使用している。

②『太陽』（博文館）

⊡第 1 巻第 1 号（1895 年 1 月号 1894 年 12 月印刷）

論説文中に「露西亜」が 1 例（p.36）見られる。海外思想欄には「魯國皇太子（新帝の略歴）の見出しで、「魯國皇室」、「魯國人」、「露國語」、「露語」、「魯國」、「露國人民」、「魯國」の順に見られる。海外彙報欄には「露西亞」の見出しで、「露帝」、「露國皇帝」、「露帝」の順に見られる。記事によっては「魯」と「露」の混用が見られ、雑誌社として「露」が定着しているわけではない。

③『日清戦争実記』（博文館）

⊙第一編（1884 年 10 月 8 日 13 版）、第六編（1894 年 10 月 19 日）

第一編では「露西亞」（1 例）、「露國」（12 例）、「露」（8 例）が見られ、すべて「露」で統一されている[23]。第六編では「露國」（5 例）、「露」（2 例）、「魯」（2 例）が見られる[24]。同一記事での混在が見られるが、「魯」は少ない。

④『日露戦争実記』（博文館）

⊙第壹編（1904 年 2 月 5 版による）におけるロシア表記

明治天皇による「日露戦役宣戦ノ詔勅」（1904）の記載には、「露國」の表記のみ 9 例見られる。その他『日露戦争実記』第壹編に記載されている漢字表記に関しては「露西亞」、「露西亞」＋名詞（「露西亞國」「露西亞獨逸兩帝國」等）、及び略称「露」、「露」＋名詞（「露人」「露國」等）、名詞＋「露」（「日露」「征露」）が見られる。この雑誌記事（p.1〜p.108）の見出しを除く文では漢字に平仮名傍書が付されている。「露西亞」の傍書は大部分が「ろしあ」である。例外として、傍書の平仮名「ろしや」が 1 例（某将校作「征露の歌」に「露西亞勢」p.92）、傍書の片仮名「ロシア」が 1 例（陸軍少将福島安正「征露の歌」p.91）ある。これらは投稿「戦争文学」所載である。漢字ではなく片仮名表記として「ロシヤ」（「露船ロシヤ號」p.13、「ロシヤ」（船名）p.14、陸軍編輯官横井忠直「征露軍歌」に「ロシヤ國」4 例と「ロシヤ」2 例 p.91、日比野寛「露西亞征伐」に「ロシヤの軍」p.93）が見られた。これらは海戦記事と投稿文学においての記載である。第一編付録は目次によると「特別大附録日清韓滿極東最新大地圖」と記載されているが、実物では「日露清韓新圖」と題し、「明治 37 年 2 月 20 日発行」となっている。この付録地図では「露西亞」が 2 例見られる。

以上のように編集方針として「露西亞」を基本とし、略称「露」・「露國」・「露艦」・「日露」等が多用され、「露」が定着している。この雑誌の初めの記事「宣戦の詔勅」（1904 年 2 月 10 日）で「露國」のみが見られるため、この詔勅の影響を大きく受けたと考えられる。

・第百拾編（1905 年 12 月、再版、終刊）におけるロシア表記

「日本赤十字社の功労」（緑堂著）と題する文中で、「平常なれば一種の蔑語を以て魯助と云ひ、野郎と罵るべき我傷兵が露國看護者を遇するに大人々々（支那語の敬称）なる敬語を以てし」（p.52 傍書仮名は省いた。下線稿者）と記載されている。ここで 1 例のみ例外的に使用される「魯」は、「魯西亞野郎」と「魯かな男」という意味を掛けた言葉である。他は投稿文も含めてすべて「露西亜」、「露國」、「露人」等が見られる。

『日露戦争実記』は約 1 年 10 カ月で 110 編まで発行された雑誌であり、その版数も多く（架蔵 110 編中では 5 版が 6 冊、6 版が 5 冊、7 版が 3 冊、9 版が 1 冊）流通量が大きい。「第一號は二十六回版を重ねて十萬餘部を発行した」（『博文館五十年史』[25]）ということである。国民に広く読まれたであろうから、この雑誌が国民の「露」表記定着に大きく影響したに違いない。

⑤『太平洋』第 1 巻第 1 号（博文館 1903 年 1 月）

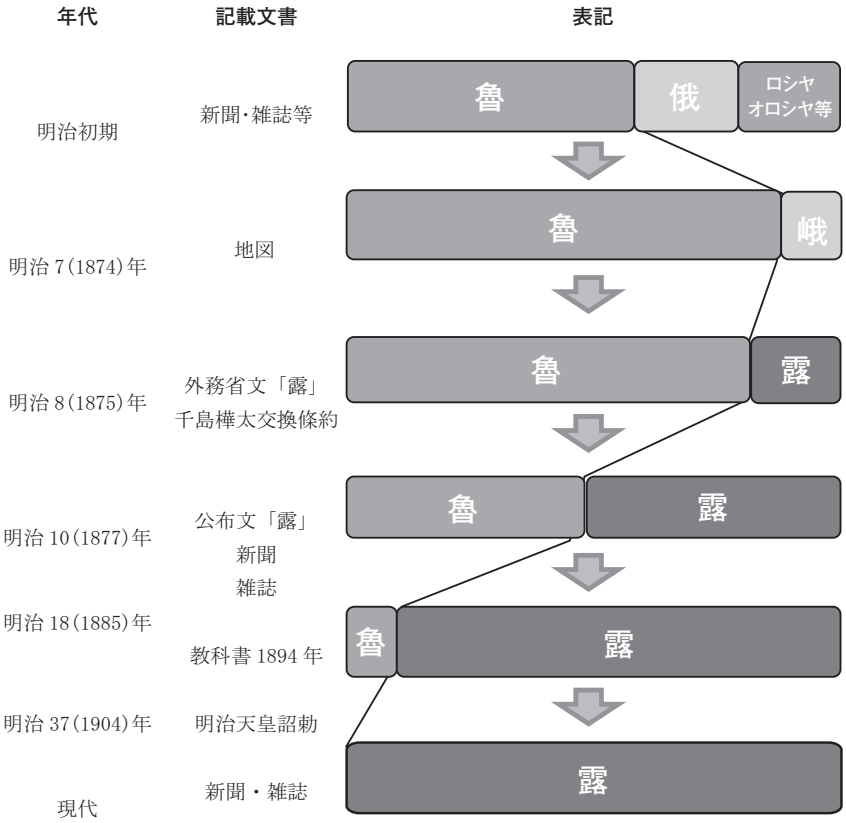
「露西亜」（p.33　p.71　p.203）が各 1 例で、略称「露國」（p.71）、「露領西伯利」（p.204）が 1 例ずつ見られる。数は合計 5 例で少ないが「露」のみ使用され、「露」が定着している。

雑誌類で確認された中では上述の 1884 年『日清戦争実記』が「露」表記の初めである。その後「魯」と「露」の混用時期の後、1904 年『日露戦争実記』の頃には「露」が雑誌類にも定着していた。

結論

歴史上では、1842 年アヘン戦争で英国は香港を領有した。そして、1858 年英・仏・露・米の天津条約、1860 年北京条約により英・仏・露は中国の一部を領有し、列強が中国に土地分割を要求するようになった。1871 年日清修好条規を定めた。日本国民は

図 1　ロシアの漢字表記の変遷図



清の没落を知り、列強を恐れた。この頃には既にロシアとの北方領土問題があった。日本は 1894～95 年の日清戦争で勝利したが、三国干渉（露・独・仏）をうけた。このような歴史的背景の中で、1874 年新聞記載ペルー国名の表記中で「魯」と「露」が使用されていたのと類似するように、ロシアの漢字表記にも「露」が見られるようになった。その始まりは外務省からであり、公には 1875 年樺太千島交換条約公布文が新聞に記載されたことである。教育界では遅れて、地図では 1893 年、教科書では 1894 年に「露」が日本で通用するようになった。その後も古くから使用された「魯」表記も見られ、1893~1900 年には「露」及び「魯」の両表記が混在した。日露戦争開戦の詔勅（1904 年、ロシアを示す表記は「露西亜」ではなく、日本独自表記の「露國」のみであった）に記載の「露国」表記は新聞・雑誌類へ特に大きな影響を与えた。日露戦争に勝利し、以降、新聞雑誌における「露國」、「露西亜」の大量の使用が国民への「露」使用定着に拍車をかけた。そして現代まで「露」が使用されている。以下にロシア表記変遷図を示す。

注

1） 神戸大学人文学研究科『海港都市研究』2009 年「日本における『台湾』の変遷について―主に近世を対象として―」

2） 東京外国語学校では明治 10 年に「魯学科」から「露学科」に変更されている。その理由は 1876 年に「ロシア領事館側からのクレーム」であるとしているが、根拠となる資料が示されていない。（『東京外国語大学史』1999 年　p.62）

3） 熊沢徹「日魯から日露へ」（歴史科学協議会編集『歴史評論』No.457 記載）

4） 熊沢徹「日魯から日露へ」歴史科学協議会編集『歴史評論』（1988 年 5　No.457　校倉書房）p.47～52。

5） 明治初期政府の基本公文原簿。六年以前は原文書焼失のため写本。六年以降は原文書を収めてある。（『国史大辞典』吉川弘文館　1985 年による。）

6） ただし、重野安繹「幕府時代魯人北海之関係」（1904 年 3 月 13 日東京学士院講演）での記録として「明治五・六年でありましたか、向こうから外務省へ通報いたしまして、魯の字は露の字に変えろ、魯と云うのは魯鈍の魯の字であって、字が悪いから露の字に変えろと云う照会がありまして、所謂露の字を用います」とある。根拠となる資料が明示されておらず、しかも彼の講演題目は「魯」を使用している。熊沢氏結論にならざるをえない。重野安繹の「字を変えたからと云って、其の人が魯鈍であれば仕方がない。（中略）日露と云う字は、日が出れば露は乾くと云うことで、最も戦争には味方に取って吉兆なこと」が前掲論文の注で記載されている。この発言は日露戦争が始まってから約 1 カ月後の講演であり、重野氏自身が「魯」から「露」への変更を不信に感じたことが理解される。

7） GUBBINS『CHINESE-JAPANESE WORDS PART Ⅱ』TRŰBNER&Co.（博文社復刻 1891 年）による。

8） 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店 1960 年初版の 1974 年第 4 刷。

9） 方毅等編『辞源』商務印書館 1915 年初版 1918 年五版。同書 1983 年版には項目の記載は

無い。

10） 外務省『日本外交史料』巌南堂書店 1993 年復刻による。

11） 岡本柳之助『日魯交渉北海道史稿』阪上半七 1898 年。

12） 「樺太」「千島」は日本独自表記といえる。「樺太」は「唐太」、「柯太」、サハリン（Sakhalin）を訳した「サカレン「庫頁（サガレン）」表記も見られる。

13） 「羅馬」（ローマ）、「波羅泥亞」（ボロニア＝ポーランド）、「呂宋」（ロソン、ルソン）、「佛勒里達」・「福落里得」（フロリダ）、「普魯士・孛漏生」（プロシ）。眞左樹繁『童蒙学そめ』（阪府下書林会社 1872 年）、馬邦裨治文撰述、大日本箕作阮甫訓点『聯邦志略』（江左老皂館蔵梓 1864）、英国慕維廉著『地理全志』（1858 年）等による。

14） 『宛字外来語辞典』（宛字外来語辞典編集委員会編　柏書房 1979 年）によると「比露・比路・平柳・白露・孛露・秘露・俾路・秘魯」が記載されている。「孛露」は『西洋紀聞』（東洋文庫 113　p.59）に漢訳としている。『万国坤輿図』及び『職方外紀』（『日本古地図大成』1975 年による）には確かにこの「孛露」が見られる。『外國人名地名表』（1924 年商務印書館発行を 1975 年汲古書院影印発行）には「Peru 秘魯」と記載する。中国で 17 世紀には「露」とし近年に「魯」と記載している。

15） 『東京日々新聞』（復刻　日本図書センター　1994 年）による。

16） 慕維廉『地理全志』（上篇第四冊、爽快樓蔵梓 1858 年）では「秘魯」と記載されている。及び、何崧齢『標準漢訳外国人名地名表』（1924 年）でも「秘魯」と記載されている。中国では“Peru”の漢訳には「露」は使用されていない。但し、後書で 1 例の「露格（Ruge）」が見られる。

17） 『朝野新聞　縮刷版　1』 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編　ぺりかん社　1981 年

18） 『宛字外来語辞典』（宛字外来語辞典編集委員会編　柏書房 1979 年）によると「孛漏士・普魯西・孛露西・布魯斯・普漏西・普魯社・普魯斯」等の記載がみられる。『外國人名地名表』（1924 年商務印書館発行を 1975 年汲古書院影印発行）には「Prussia 普魯仕」と記載。

19） 福澤諭吉『世界國盡』（慶応義塾出版局 1869 年）には本文で「魯西亜（ろしあ）」、頭注で「魯西亜（ろし）」が見られる。「凡例」において「地名人名等は西洋の横文字を読みて略その音に近き縦文字を当ることなれは古来翻訳者の思々に色々の文字を用ひ同じ土地にても二も三も其名なるに似たり又或は唐人の翻訳書を見て其訳字を真似したるもありこれは唐の文字の唐音を以て西洋の字音に当たるゆへ唐音に明るき学者達には分るべけれとも我々共には少しも分らす故に此書中には勉て日本人に分り易き文字を用るやふにせり（中略）読者本字を当にせずして仮名の方を記憶すべし」（傍書仮名は省いた）。また福澤諭吉『真字素本世界國盡』（福澤氏版 1875 年）では「魯西亞（ロシヤ）」（原文は左傍書）のみを使用している。ただし、例外として『福澤全集Ⅰ』「緒言」〈1897 年初版の 1926 年版による。「唐人往来」（1865 年）の改訂文〉において、「魯西亜（ろしや）」（p.15）と「露西亜」（p.25,p.26）が混在している。出版の際、前方文中の「魯西亞」には気がつかずそのままとし、後方文中での「露西亜」はもとの「魯西亞」表記から変更したのであろう。1897（明治 30）年には「露西亜」が一般的とされていたためであると考えられる。これ以後の表記は「露」を使用するようになった。

20） 福澤諭吉『福翁自伝』時事新報社　1899 の 1903 第 16 版　傍書は「ロシア」と記載している。p.219,p.220,p.221,p.222,p.223,p.224,p.225,p.226,p.241。

21） 東洋書店編集部（岩田氏）御教示による。2012 年 9 月 11 日記事。

22)　東洋書店編集部（岩田氏）御教示による。2012 年 9 月 11 日記事。

23)　多田省軒著　辻本尚古堂等　1894 年

『日清戦争実記』第一編（13 版）記載のロシア表記（明治 27 年 10 月）

用例	頁	用例数	総数
日本支那露西亜 r. ロシヤ	p.2	1	1
露國軍艦 r. ろこくぐんかん	p.17	1	
露國東洋艦隊	p.50	1	
露國公使	p.54,p.60,p.81,p.97	4	
露國	p.60（3）,p.61（2）,p.82	6	12
英露獨佛	p.3	1	
露公使	p.60,p.61（r. ろかうし）	2	
露政府	p.61	1	
露英米	p.61	1	
英露	p.75,p.77	2	
露領	折り込み地図	1	8

24)『日清戦争実記』第六編（初版）記載のロシア表記（明治 27 年 11 月）

用例	頁	用例数	総数
露國皇帝	折り込み写真	1	
露國公使	p.46	1	
露國東洋艦隊	p.106	1	
露國	p.109d（r. ろこく）,p.109d	2	5
露軍 R ろぐん	p.91u	1	
英露	p.105u	1	2
英、魯、佛、米の四国	p.105u	1	
魯兵	p.105u	1	2

u は上段　d は下段

25)『博文館五十年史』博文館 1937 年　p.171。

（よこた　きよこ／神戸大学博士課程（文学）修了生）